

テーマ展「祈りと救いー彦根城博物館仏教美術選ー」展示作品リスト

番号	指定	作品名称	数量	時代	所蔵者	備考
<b>◆祈る人々</b>						
1		ひやくまんとう 百万塔	1基	奈良時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	ちんごこつか 鎮護国家を目的に制作された。 だらに 陀羅尼(経典)が納入された状態で伝来。
2		こけらきょう 柿経	2束	鎌倉時代	彦根城博物館 (日下部陽家伝来資料)	仏堂の屋根を葺くのに用いられた柿に経文を記したもの。
3		こんしきんでいみょうほうれんげきょう 紺紙金泥妙法蓮華経	8帖	江戸時代	清凉寺	なおのぶ 井伊家7代直惟の側室である緑樹院筆。直惟の27回忌の追善供養として制作された。
4	市指定 文化財	かけぼとけ 懸仏	2軀	室町時代 永正元年 (1504年)	勝島神社	あめわかひこ みしょうたい 天稚彦神社の御正体(御神体)として制作された懸仏。
5		ちごだいしぞう 稚児大師像	1幅	室町時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	蓮華に端座し、合掌する幼少の空海像。
6	市指定 文化財	ぜんどうだいしぞう 善導大師像	1幅	室町時代	高宮寺	浄土教を大成した中国・唐時代の僧。
7	県指定 有形 文化財	たあしんきょうぞう 他阿真教像	1幅	室町時代	高宮寺	時宗二祖の遊行上人。画面に下方には他阿を礼拝する2人の人物が描かれる。
<b>◆衆生を救う仏</b>						
8	市指定 文化財	じょうどへんそうず(たいままだら) 浄土変相図(当麻曼荼羅)	1幅	鎌倉時代	唯稱寺	阿弥陀如来が棲む西方極楽浄土を描く。
9	市指定 文化財	あみだによらいごぞう 阿弥陀如来坐像	1軀	平安～ 鎌倉時代	観音寺	膝上で定印を結ぶ。
10		あみだによらいごぞう 阿弥陀如来坐像	1軀	平安時代	彦根城博物館 (岡島家伝来資料)	鑄造仏。膝上で定印を結ぶ。
11	市指定 文化財	ほうべんほっしんぞう 方便法身尊像	1幅	室町時代	善敬寺	真宗における阿弥陀如来像の一形式。攝取不捨印を結ぶ。
12	市指定 文化財	あみださんぞんらいごぞう 阿弥陀三尊来迎図	3幅	鎌倉時代	高宮寺	雲に乗り来迎する阿弥陀三尊を描く。
13	市指定 文化財	あみださんぞんらいごぞう 阿弥陀三尊来迎図	1幅	鎌倉時代	善照寺	雲に乗り来迎する阿弥陀三尊を描く。 画面右下に家屋と往生者を描く。
14	市指定 文化財	あみださんぞんらいごぞう 阿弥陀三尊来迎図	1幅	南北朝～ 室町時代	唯稱寺	雲に乗り来迎する阿弥陀三尊を刺繍で表す。 画面右下に女性の往生者を描く。
15		じぞうぼさつりゅうぞう 地藏菩薩立像	1軀	江戸時代	彦根城博物館 (岡島家伝来資料)	腰を捻って立つ地藏菩薩像。
16	市指定 文化財	あみださんぞんぞう(せんこうじしきあみださんぞん) 阿弥陀三尊像(善光寺式阿弥陀三尊)	1幅	室町時代	高宮寺	信濃善光寺の本尊と同形式で表された阿弥陀三尊。下方には三尊を仰ぐ月蓋夫妻を描く。
17	市指定 文化財	でんくまのごんげんようごぞう 伝熊野権現影向図	1幅	南北朝時代	高宮寺	神が僧形の姿で影向した図。 神と仏を同一視する神仏習合の思想に基づいた作例。

※1～17の作品は、すべて彦根城博物館が収蔵・保管しています。

## 写真解説

\*番号は作品リストに則しています。

### 1 百万塔 1基

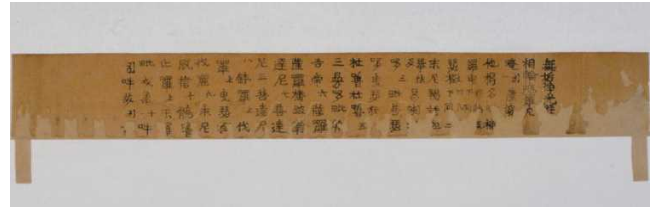
総高 21.5cm

奈良時代 宝亀元年（770年）

当館蔵（井伊家伝来資料）

百万塔は、奈良時代に称徳天皇の発願により作られた100万基の小塔。天平宝字8年（764年）に起きた<sup>えみのおしかつ</sup>恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱を平定した後、戦死者の冥福を祈るとともに、<sup>ちんごこつか</sup>鎮護国家や滅罪の願って制作したと考えられています。小塔を建立する供養の方法は、『無垢浄光大陀羅尼経』に説かれており、宝亀元年（770年）に全基が完成すると、東大寺や法隆寺、四天王寺などの畿内十大寺に奉納されました。塔身には穴が穿たれ、梵語（サンスクリット）の章句を音写した<sup>だらに</sup>陀羅尼を印刷した紙片が巻かれた状態で収められています。

現在も法隆寺には4万基を超す百万塔が伝来していますが、近代には、復興の資金寄付の礼として一部の百万塔が譲渡されました。本作もその1つで、明治時代に井伊家に入りました。



### 5 稚児大師像 1幅

縦 98.2cm 横 44.0cm

室町時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

画面中央に描かれた円相の中に、<sup>れんげざ</sup>蓮華座に坐し、<sup>がっしょう</sup>合掌する童子が描かれ、画面上部には、「夫遍照金剛、讚岐国多度郡人、生年五六歳之間、夢常見、居八葉蓮華中、諸仏共物語也」と記された色紙が置かれています。この文句は、空海（<sup>へんじょうこんごう</sup>遍照金剛）が、5～6歳の頃に夢の中で諸々の仏と物語ったる夢を見ていたという逸話を引用したもので、本図がこの逸話を絵画化したものと分かります。語り合っている諸仏の姿こそ表されていませんが、空海の正面を見つめる眼差しが、眼前の仏を拝していることを見る者に想像させます。

本作は、振り分け髪の子供空海（稚児大師）の容姿をはじめ、台座である蓮華に至るまで丁寧かつ精緻に描いており、稚児大師像の中でも、代表的な作例として知られています。



9 阿彌陀如来坐像 1 軀

像高 79.3 cm

彦根市指定文化財

平安時代末期～鎌倉時代初期

観音寺蔵



西方極樂浄土さいほうごくらくじょうどの教主である阿彌陀如来の彫像です。本像のふくよかで穏やかな顔立ちと大きさがほぼ揃った螺髪らぼう、抑揚を押さえた身体表現は、平安時代後期の作品に通じます。目には水晶を嵌めており、この技法は12世紀後半に登場するもので、また、はっきりとした彫りの流れるような衣ひだの襞は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて見られる特徴です。こうした特色を併せ持つ点から、本作は、平安時代末期から鎌倉時代初期に制作されたものと考えられます。

阿彌陀如来の仏画や仏像は、浄土に往生することを願う浄土思想が平安時代中期以降に広まるとともに、数多く制作されました。その機縁は、寛和元年（985年）に完成した『往生要集』おうじょうようしゅうで、同書は、人々に往生を勧めるとともに、往生に必要な行為や作法などを具体的に説く中で、阿彌陀如来の像を作り、念仏の助けとすることが示されています。

14 阿彌陀三尊来迎図 1 軀

縦 61.0cm 横 28.4cm

彦根市指定文化財

桃山～江戸時代前期

唯稱寺蔵

浄土思想では、西方極樂浄土さいほうごくらくじょうどに往生が決まった人の臨終時には、阿彌陀如来が往生者を迎えに来るとされています。本図は、画面右の往生者のもとに來迎する様子を刺繍で表しています。

中世以降、阿彌陀如来と脇侍かんのんの観音・勢至の二菩薩からなる三尊形式の来迎図が多数作られ、中には、本作のように刺繍によって描き出す繡仏しゅうぶつも散見します。繡仏には、頭髪など黒で表現する箇所、毛髪を用いることがあります。中世には故人の追善をはじめ、生前に自身の菩提ぼだいを弔う逆修ぎやくしゅうが盛んになり、その供養の1つとして、髪を縫い込んだ繡仏が制作され、本作にも頭髪が使用されている可能性があります。また、繡仏の来迎図には、女性の往生者が登場することが多く、繡仏の制作に女性が深く関わっていたことを示すとともに、浄土思想が男女問わず受容されていたことがうかがえます。

